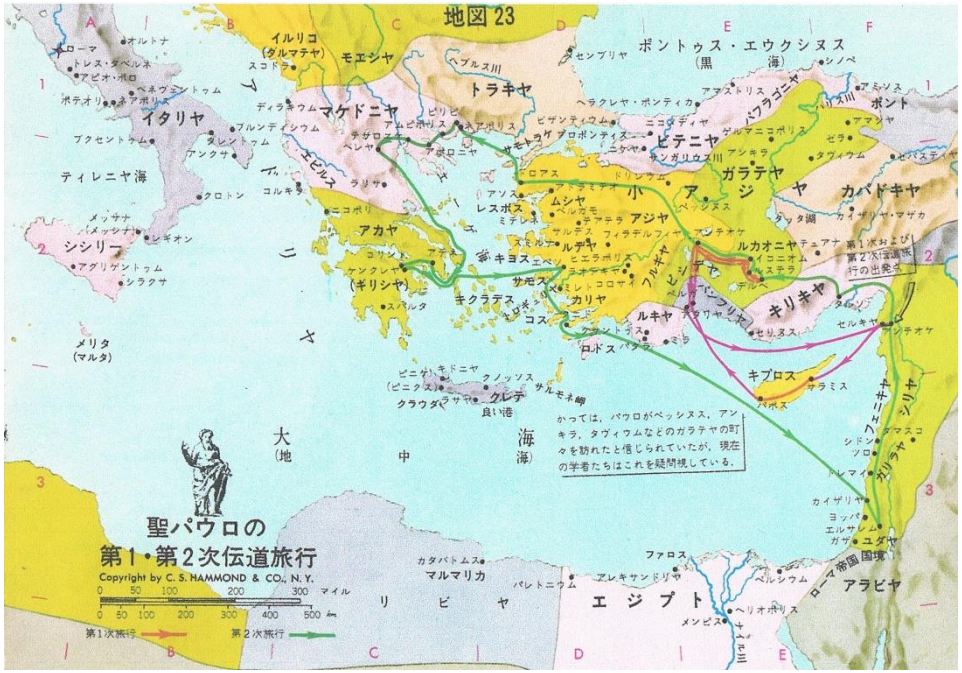
新　　年　　礼　　拝



2020 年 1 月 5 日

説教「いつも喜んでいなさい」

テサロニケ人への手紙第一 5 章 16 節

20120 年を迎えました。この年も、主日の礼拝の中で、御言葉を着実に学んでいきます。今朝は姉ヶ崎キリスト教会の今年の御言葉です。

1．テサロニケ人への手紙第一

①この書簡の著者　　使徒パウロはユダヤ人でしたが、ローマ帝国の市民権をもち、タルソに住んでいました。律法をガブリエルから学び、パリサイ派の先鋭として、キリスト教徒を迫害していました。ところが、ダマスコ途上でキリストと劇的に出会い、回心して、キリストの宣教者となっていきます。キリスト教会の歴史において、パウロが果たした役割は多大なものがあります。

②三回の世界伝道旅行　　使徒パウロはローマ帝国支配の全世界と言っても良い、地中海諸国を巡って福音宣教をしました。それは三回にわたりました。掲載の地図には一次、二次の伝道旅行の道筋が示されています。訪問する各地において、クリスチャンが続々と生まれ、各地にキリスト教会が建て上げられていったのです。特に、それらの地において、異邦人が多く救われていったということが重要なことです。神が、ユダヤ人でありながら国際人であるパウロを立てられた理由はこんなところにもあったのです。

③テサロニケ人への手紙　パウロの第二次伝道旅行を通して、建て上げられた教会です。テサロニケはエーゲ海に面した港町で、東西交通の要衝でした。テサロニケの町を去った後に、試練にさらされているのを知り、コリントから励ましの手紙を紀元 51 年頃に送ったのです。この書簡自体は特別のテーマはありません。4 章以下には主の再臨に備えることについて述べられます。たとえば、「主は号令と御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身から下ってこられます」(4:16) とあるように再臨の様が伝えられています。

2．今年の御言葉（前段～16 節）

①目を覚まして（16 章前半）　パウロはテサロニケ教会の人々の信仰を信頼したので、終わりの日の出来事が「盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。あなたがたは、光の子どもです」(4,5) と励まし、「目を覚まして慎み深くしていましょう」(6) と促しています。そして、直前の 15 節では「悪をもって悪に報いないように気をつけなさい」と戒めています。ことほど左様に、テサロニケの教会の人々には、細やかなる導きがなされています。

②いつも（16）**「いつも」**　そこで、いよいよ今年の御言葉である5章16節になります。「いつも喜んでいなさい」の「いつも」です。「パントテ」が元の言葉です。まさに、「どんな時にも」「いつも」という意味です。この言葉は終わりの日のことなどが語られる時に、よく使われます。緊張感をもって、「いつも」ということになります。しかし、普段の何でもない時にも「いつも」と言われると、どうでしょうか。私達は弱い存在です。肉体の面でも霊的な面でも、調子の良い時も悪い時もあります。ところが、ここでは委細構わず「いつも」という語が使われているのです。

③喜んでいなさい。（16）**「喜んでいなさい。」**「カイレテ」というのが元の言葉です。「パントテ、カイレテ」（いつも喜んでいなさい）。「喜び」（カラ）いう言葉は、裾野が広いので、一年かけてじっくりと学んでいければ良いなと思います。例えば、ピリピ人への手紙は喜びの書簡と言われます。パウロが獄中にあって、記した書簡ですから、人間的には恵まれない環境や状況の中にあっても、享受することができるのが「喜び」であることがわかります。もちろん、喜びはきわめて日常的な喜びを含んでいることは言うまでもありません。例えば、目標としていた仕事、学び、試験などが達成できたという喜びがありましょう。芸術、スポーツ、読書などを通して得られた喜びもありましょう。

３．この勧めの主は（18節後半）

①これが（18）**「これが」**　これが何を指すのか、少なくとも16~18節の言葉を指しているでしょう。ですから、「いつも喜んでいなさい」も、確実に入っています。

②キリストにあって（18）**「キリスト・イエスにあって」**人間的なことではなく、キリストにあってのことという、パウロがよく用いる表現のひとつです。

③神の望み（18）**「神があなたがたに望んでおられることです。」**つまり、「いつも喜んでいなさい」というメッセージは、神が私達に望んでおられることなのだというのです。

《結論》

「いつも喜んでいなさい」という御言葉を聞いて、「そう言われても、いつも喜ぶことなどとてもできない。」と最初から取り合わない言葉を聞くこともあります。しかし、御言葉が「いつも喜んでいなさい」というなら、いつも喜ぶ可能性があることを示しているのです。それなら、それを追求することは必要なのではないでしょうか。この御言葉は姉ヶ崎キリスト教会の2020年の御言葉です。さまざまな角度から、一年間学んでいきたいと願っています。今朝はその一端を学びとっていきます。

さて、弦楽器は心に響く音を私達に届けてくれます。一昨年のチャペルコンサートで、ベアンテ・ボーマン氏が奏でてくれた音楽を思い出してください。弦楽器は演奏の前に必ずチューニングがされています。音調整です。標準音に弦は張られます。きちんとした調整がされなければ、良い音を出すことができません。

「いつも喜んでいなさい」の「いつも」という状態は、喜ぶための準備でもあります。つまり喜ぶためには、弦が音を鳴らす準備をするように、備えなければならないのです。いつも喜びの音がならせるように、チューニングされなければならないのです。聖霊は私達に働きかけてくださいます。その時に、楽器もふさわしい音がなるようにしておかなければなりません。この時の楽器はクリスチャンのことです。つまり、クリスチャンは賛美、祈り、御言葉などをもって、日頃から備えておかねばならないのです。賛美をもって心を主に向け、祈っていく。また、御言葉によって向くべき方向の修正をしてもらう。クリスチャンは賛美と祈りと御言葉を自らの生活の要所に据えておかなければならないのです。「いつも喜んでいなさい」という御言葉が実現していくための、第一歩です。

次に、「いつも喜んでいなさい」という御言葉が実行されていくためには、喜びの源を探さなければなりません。クリスチャンにとっての、喜びの不動の岩は何でしょうか。それはキリストの十字架と復活です。私達の存在の根本的な問題の解決がそこにあるからです。つまり、人間のいやしがたい罪の贖いを、キリストが十字架上で成し遂げてくださったがゆえに、信ずる者には救いがもたらされます。また、罪を犯したクリスチャンも罪の告白に従って、赦しをいただけます。また、もう一つの人間にとっての究極的な問題は死です。しかし、キリストは十字架上で死なれた後、三日目に復活してくださいました。十字架と復活の主を信じる者には、永遠の命が与えられます。信者はその命を与えられたのですから、もはや死について思い煩う必要がありません。この不動の岩はキリストのうちにあります。ですから、いつも喜んでいくという御言葉が実現されていくためには、クリスチャン生活において、十字架と復活の福音にいつももどっていくことが重要なのです。福音は喜びの源泉であることを、まずは覚えておきましょう。

今朝は、「いつも喜んでいなさい」についての、初めの一歩を踏みました。この一年を通して、ともに深めていこうではありませんか。